

エジプト、北サッカラ遺跡の未知の墓地を掘る —ローマ支配期のカタコンベの意義および今後の調査の展望—

河合 望 金沢大学新学術創成研究機構教授

Excavating a Previously Unknown Cemetery at North Saqqara The Significance of the Discovery of the Roman Catacomb and the Future Prospect of the Research

KAWAI, Nozomu Professor, Institute for Frontier Science Initiative, Kanazawa University

河合
望

1. はじめに

サッカラ遺跡は、古代エジプト王朝時代の開闢より首都となり行政・経済の中心であったメンフィスの主要な墓地が形成され、エジプト考古学の黎明期より各国隊によって調査が継続されてきた。従来のサッカラ遺跡での考古学的発掘調査は、初期王朝時代や古王国時代のピラミッドやマスタバ墓で重点的に実施され、新王国時代の墓地については20世紀末になってようやく発掘調査が実施されるようになった。一方で、新

王国時代の国家神アメン信仰の中心地であるテーベのネクロポリスの調査は200年におよぶ長い歴史があり、従来の新王国時代史は主にテーベの豊富な資料を基に構築されてきたと言っても過言ではない(河合2017、2020)。このような状況に鑑みて、サッカラ遺跡において新王国時代の墓地の調査がさらに進展することが期待されている。

以上のような問題意識から、2015年度よりサッカラ・ネクロポリスにおける新王国時代の墓をテーマとした調査研究を開始した。これまで踏査、測量、物理



図1 調査区周辺地図



図2 カタコンベ外観



図3 カタコンベ俯瞰画像(3Dモデルより作成)

探査を行い、その結果、新たに新王国時代の墓地を確認するとともに、北サッカラ台地の東斜面(C地区と呼称、図1参照)に未発見の新王国時代の岩窟墓群が存在する可能性が高いとの結論に至った(河合他2017a、2017b、2018a、Kawai 2020b)。そして、2017年にC地区において試掘調査を実施したところ、付近に近年の攪乱を受けていない遺構が存在することが推定された(河合他2018b)。さらに、2019年に2回の発掘調査を実施し、当初目的としていた新王国時代の岩窟墓の発見には至らなかったものの、エジプトのナイル川流域の遺跡で初の発見となるローマ支配期のカタコンベ(地下集団墓地)を良好な状態で発見した(河合他2019、Kawai 2020a)。

2. ローマ支配期のカタコンベ

発見されたローマ支配期のカタコンベは、第5次調査の終盤で内部の状況が確認されたに過ぎず、全容の把握は今後の調査の進展後となるが、これまでの調査で得られた情報から、カタコンベの概要について報告する。

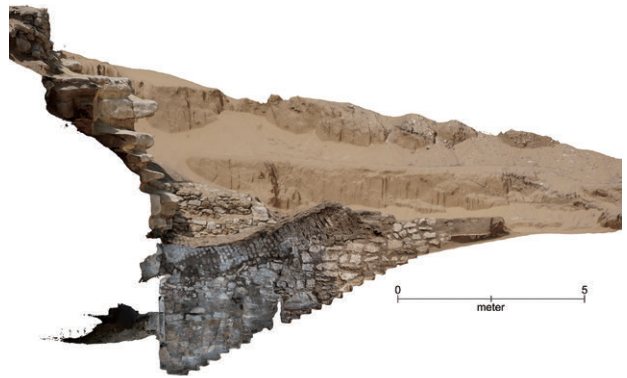


図4 通廊断面図(3Dモデルより作成)

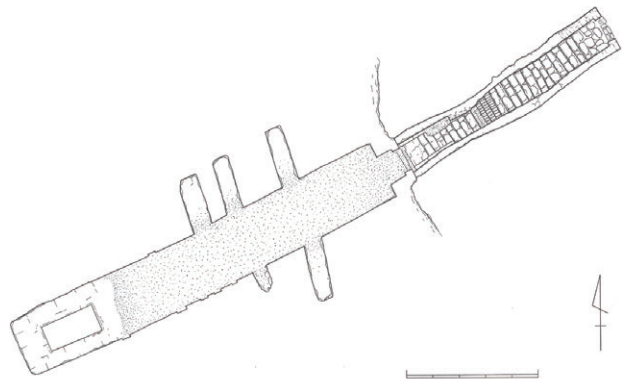


図5 カタコンベ平面図(柏木裕之氏作成)

カタコンベは、北サッカラ台地の東斜面の標高40～45mあたりに穿たれた岩窟墓である(図1、図2)。その中心軸は北東から南東方向に伸びており、岩盤に穿たれた岩窟部とそこに至る通廊から構成されている(図3、図4、図5)。通廊は、長さ約9m、幅は約1.2mである。通廊の入口は矩形の日干レンガ製の壁体に囲まれ、床面には石灰岩のブロックが敷き詰められ、途中から階段となっている。階段が始まるあたりから壁体も石灰岩製になり、途中から日干レンガ製のヴォールト天井に覆われている。ヴォールト天井に覆われた通廊の内部については、層位の観察から、石灰岩の壁と日干レンガの天井が作られた後に、少なくとも一度崩落し、少し砂が堆積する時間をおいてから、再度、壁や天井が再建され、通廊が利用されたと考えられる。

通廊内部には、2箇所で日干レンガの封鎖壁が検出された。一つは、残存する天井の東端のほぼ真下であり、空積みで最上層の上に作られている。おそらく、最後に利用された時期に作られた可能性が高い。もう一つは通廊内部中央付近にあり、こちらも空積みである。なお、この封鎖壁の奥(西側)には、北側の石壁を支えるように日干レンガの構造物が築かれている。石壁が内側に向かって歪み、崩落しそうな箇所に築かれ



図6 メネラオスのステラ、テラコッタ製イシス・アフロディーテ像、ランプ、土器出土状況



図8 ライオン横臥像出土状況



図7 テラコッタ製イシス・アフロディーテ像



図9 石灰岩製の門と封鎖状況

ていることから、古代における補強の痕跡と思われる。

ヴォールト天井に覆われた通廊の南北には平行して石灰岩を積んだ壁体があり、通廊はちょうどこれらの壁体の中央に位置しているとみられる。ただし、これらの壁体については床面まで発掘できていないので、その性格については今後の調査の結果を待ちたい。

ヴォールト天井に覆われた通廊は岩盤面に到達した部分で終わる。岩盤面にはナイル川の東岸に位置するトゥーラ産と思われる良質の板状の石灰岩製のコーニス、まぐさ、脇柱が貼り付けられるように設置され、岩窟への門となっている。ヴォールト天井に覆われた通廊は、コーニスの幅の内側に位置するため、通廊の部分は少なくとも石灰岩製の貼り石の門が設置されてから追加されたと考えられる。ただし、それが石灰岩製の貼り石の門と同時期に作られたのか、あるいは時期差があるのかは今のところ不明である。

石灰岩製の門のコーニスの上部の中央には、岩盤を穿った部分に墓碑とみられるステラ(石碑)が配されていた(図6)。ステラの図像は伝統的な古代エジプトのステラに描かれる有翼日輪と神々の姿で表現されてい

るが、碑文はギリシア語である。碑文には「召使、メネラオス」という人物名が認められた。召使とはおそらく神の召使と考えられ、メネラオスは聖職者であるとみられる。ステラの前面には、岩窟部に由来すると考えられる木片、5体のテラコッタ製イシス・アフロディーテ像(図7)、ローマンランプ、土器などがある(図6)。層位の検討などから、これらの遺物はおそらく盗掘の際にここに置かれたものと考えられる。

石灰岩製の門の前には、南北で向かい合うように置かれた石灰岩製のライオン横臥像が2体、古代に設置されたままの原位置で発見された(図8)。門を守護するかのように配置されている。ライオン横臥像はカタコンベの利用の初期に伴うものであると考えられる。というのも、北側のライオン横臥像は、前述した日干レンガの補強に一部覆われており、通廊の壁の劣化に伴ってこのような補強がされたとするならば、ライオン横臥像は墓利用の初期から設置されていたと考えられる。

岩窟部の入口は、高さ約1.64 m、内側の幅が約91 cmを測った。入口には、日干レンガによる封鎖がされていた(図9)。モルタルなどは使わない空積みで



図10 デメテリアのステラ



図11 テラコッタ製イシス・アフロディーテとハルポクラテスの像

ある。封鎖壁の観察から、少なくとも3回の封鎖があったと考えられる。一番上の封鎖壁は、層位の観察から、盗掘活動に関連するものであると推定される（盗掘後に封鎖？）。砂を挟んで、中央の封鎖壁があり、更に砂を挟み、一番下にも封鎖壁がある。両者は墓を利用している際の可能性も考えられる。

岩窟部の長さは約15m、幅は約2.5mである（図5）。岩窟部に関しては、2019年9月の第5次調査の終盤に発見されたため、来期以降に本格的な調査を行う予定である。内部を観察した限りでは、北壁から3つの副室、南壁から1つの副室と作りかけの部屋が穿たれていた。また、北壁の中央にはステラを嵌め込んでいた壁龕が1箇所認められ、南壁には5箇所にステラが壁に埋め込まれていた。また、副室への入口にはモルタルが塗られている箇所もあり、その上から漆喰が塗られ、彩色を施している部分も確認された。岩窟部の奥にはシャフト（竖坑）の存在が確認されたが、内部には進入していない。入口側から砂層が堆積しており、その上からも人骨が確認されたことから、ある程度入口が開いていた時期があり、その後も埋葬が継続されたと考えられる。砂層は奥に行くにつれて薄くなり、床面直上には壁際に人骨や木棺が配されていた。また、副室にもミイラの納められた木棺や人骨が積み重なった状態で埋葬されていた。その周辺には複数の完形の

土器も確認された。

エジプト側との協議の結果、遺物保護の観点から、デメテリアという名の女性の人物のステラ（図10）、テラコッタ製のイシス・アフロディーテとハルポクラテスの像（図11）など重要遺物の取り上げを行った。

岩窟部の全体についてはまだ把握されていないものの、内部の大量の人骨、ミイラの埋葬から集団墓地であることは明らかであり、土器、テラコッタ製像、墓碑とみられるステラの年代から、発見された遺構はローマ支配期のカタコンベであることが明らかとなった。屋外の入口周辺からは当初紀元後1世紀頃に年代づけられるローマ支配期の土器片やテラコッタ製像が大量に出土し、土器は小屋のような建造物の壁体として再利用されていたが、盗掘の際にカタコンベの入口にアクセスするための土留めであったと考えられる（図12）。そして、土器片やテラコッタ製像はカタコンベから持ち出されたものである可能性が高い。カタコンベ廃棄後の盗掘活動の痕跡と推測される。

また、カタコンベの外からは人骨やミイラが列をなして出土しており、カタコンベ由来のものなのか、あるいは同時期の単純埋葬なのかを精査する必要がある。周辺からコプト時代に特徴的なミイラも出土しており、カタコンベ周辺の通時的な墓地の利用も検討課題である。



図12 土留め遺構と人骨出土状況

3. カタコンベ発見の意義について

これまでエジプトでは、アレクサンドリアでプトレマイオス朝時代からローマ支配期に造営されたカタコンベが知られている。その中でも最も大規模なものは、2世紀から3世紀に年代づけられるコム・アル＝シュカーファのカタコンベである。ローマ支配期におけるエジプトの埋葬習慣は地域性が色濃く、ヘレニズム文化の中心地であったアレクサンドリア以外の地域、特にテーベなどの上エジプトにおいては王朝時代の伝統が維持されていた。北サッカラ遺跡で発見されたローマ支配期のカタコンベは、アレクサンドリア以外の地域では初めての発見である。また大規模なローマ支配期の墓がサッカラ遺跡で発見されたのも初めてのことである。

サッカラ・ネクロポリスでは、プトレマイオス朝時代の終焉とともに、セラペウム、アヌビエイオン、バステイオンなどの動物墓地が使用されなくなり、衰退の一途を辿っていった。文献史料によれば、セラペウムは使用されなくなったものの、紀元後170年頃ま

で別の場所でアピス牛の埋葬が行われていたという (Marković 2018: 197)。そして、紀元後4世紀の中葉からカタコンベの南に位置するアヌビエイオンの神殿中心部にキリスト教徒の集落が形成されたことが知られている (Jefferys and Smith 1988: 23)。ローマ支配の開始によりサッカラ・ネクロポリスの宗教的景観が変化し、伝統的な古代エジプトの信仰が放棄されていく中で、メンフィスの人々の埋葬習慣、来世観の具体的な変容については依然として明らかではない。カタコンベは長期に渡って利用され、盗掘は受けているものの、比較的良好な状態で発見されており、今後の岩窟部内部のクリーニング調査によって重要な情報が得られるであろう。

4. まとめと今後の展望

本発表では、2019年に実施した第4次調査と第5次調査の成果を基に現段階におけるローマ支配期のカタコンベの概要を報告し、その発見と調査の意義について触れた。今後のカタコンベの調査研究によりその全容を解明し、ローマ支配期におけるサッカラ・ネクロポリスの様相についての新たな知見を提供したい。また、周囲には王朝時代の墓の存在も確認されており、調査を進めていく予定である。今後はサッカラ・ネクロポリスの形成から衰退というより大きなテーマで本研究課題に取り組んでいきたい。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(B)(海外学術調査)「エジプト、サッカラにおける新王国時代の墓の調査研究」(研究代表者：河合望(金沢大学)、課題番号：15H05163)、科学研究費補助金基盤研究(B)「エジプト、北サッカラ遺跡における新王国時代墓地の総合的調査研究」(代表：金沢大学河合 望、課題番号 19H01337) 金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」(代表：河合 望)、金沢大学超然プロジェクト「文化資源マネジメントの世界的研究・教育拠点形成」(代表：中村慎一)、科学研究費補助金新学術療育研究「都市文明の本質」計画研究3「古代エジプトにおける都市の景観と構造」(課題番号 18H05446)による成果である。

調査参加メンバーは、河合 望(金沢大学)、近藤二郎(早稲田大学)、柏木裕之(東日本国際大学)、高橋寿光(東日本国際大学)、米山由夏(鶴見大学)、石崎野々花(早大大学院)、岡部睦(金沢大大学院)、馬場悠男、

坂上和弘(国立科学博物館)、荻谷浩子(シカゴ大学・オリエント研究所)、サリーマ・イクラム(カイロ・アメリカン大学)、サブリー・ファラグ、ムハンマド・ユーセフ、アハマド・ズィクリ、イスマイール・ムスタファ(エジプト政府考古省)である。

最後に調査を実施するにあたりご助言と便宜をはかっていただいた東日本国際大学学長の吉村作治先生に感謝申し上げる。

■参考文献

- ・Jeffreys, D. and H. S. Smith 1988 *The Anubieion at Saqqara I: The Settlement and the Temple Precinct*. London: The Egypt Exploration Society.
- ・Kawai, N. 2020a "The Discovery of a Roman catacomb at North Saqqara," *Egyptian Archaeology*, vol. 57: 10-15.
- ・Kawai, N. 2020b "Exploring the New Kingdom Tombs at North Saqqara: A Brief Report on the Archaeological Survey from 2016 to 2017," *Saqqara Newsletter*, vol. 18: 1-15.
- ・Marković, N. 2018 Changes in Urban and Sacred Landscapes of Memphis in the Third to the Fourth Centuries AD and the Eclipse of the Divine Apis Bulls. *Journal of Egyptian Archaeology*, vol. 104: 195-204.
- ・河合 望 2017 「メンフィス・ネクロポリスの調査と研究」、常木 晃、西秋良宏、山内和也(編)、『西アジア考古学・最新

研究の動向』季刊考古学第141号 83-86頁 雄山閣

- ・河合 望、吉村作治、近藤二郎、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花 2017a 「第1次北サッカラ遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23号 127-144頁 日本エジプト学会
- ・河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花 2017b 「第2次北サッカラ遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23号 145-181頁 日本エジプト学会
- ・河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美 2018a 「第3次北サッカラ遺跡踏査概報：踏査・測量・探査報告」、『エジプト学研究』第24号 48-81頁 日本エジプト学会
- ・河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美 2018b 「第3次北サッカラ遺跡調査概報：試掘調査」、『エジプト学研究』第24号 82-112頁 日本エジプト学会
- ・河合 望、吉村作治、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美、サリーマ・イクラム 2019a 「第4次北サッカラ遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号 12-31頁 日本エジプト学会
- ・河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、馬場悠男、坂上和弘、サリーマ・イクラム 2019b 「第5次北サッカラ遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号 32-61頁 日本エジプト学会
- ・河合 望 2020 「サッカラ遺跡における新王国時代の墓地の分布と新たに発見された墓地について」吉村作治(編)『オシリスへの贈り物 エジプト考古学の最前線』30-39頁 雄山閣